

〈特集補遺：まえがき〉

## 特集補遺：まえがき Special Issue: Foreword

風間 伸次郎  
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies

### 1. これまでの経緯と今回(27号)での方針について

2009年に『語学研究所論集』(以下『語研論集』)の14号で「特集」が開始され、4年前に刊行した23号まで、10のテーマに関する特集が行われてきた。その内容を振り返ると、14号:受動表現、15号:アスペクト、16号:モダリティ、17号:ヴォイスとその周辺、18号:所有・存在表現、19号:他動性、20号:連用修飾的複文、21号:情報構造と名詞述語文、22号:情報標示の諸要素、23号:否定、形容詞と連体修飾複文、となっている(ただし、まだとりあげていない文法カテゴリーも数多くある)。11年目~14年目(24号~本27号)では引き続き、これまでの特集でデータの得られていなかった言語の補遺を進めていくことを目指した。

### 2. 本学における27専攻言語の全特集データの収集達成について

幸い今年度も申請した経費等が認められ、多くの未収集のデータを集めることができた。何より今回、本学で教育されている28専攻語のうち日本語を除く27専攻語について、全言語の全データが揃ったことを報告したい。もちろん世界に6,000~7,000あると言われる言語の総数に比すればその数は依然微々たるものであり、言語類型論や言語普遍の探求に資するデータというにはまだ程遠い。しかし本学の(特に3,4年生の)教育や研究者の育成にとっては大きな意味のあることだと考えている。卒論や修論である言語の何らかの文法カテゴリーを取り上げて論じようという時、このデータによってまずその大雑把な状況を知ることができるようになった。筆者の経験では、本学では学部生でも特に系統関係の近い言語間において、その対照に興味を持つ学生が多い。ロマンス諸語やスラブ諸語においていくつかの言語を学び、その異同に惹かれる者は多いし、ヒンディー語とウルドゥー語、インドネシ語とマレーシア語の異同などについてレポートで取り上げようとする学生は多い。タイ語とラオ語、トルコ語とウズベク語に関してもおそらく同じことが言えるだろう。本特集のデータはデータベースによって自由に検索可能な形となっているので、きわめて簡単に気になる複数の言語間でその表現を対照することができるようになった。こうした関心や具体的な例文の対照に触発された探求が言語研究への意欲の拡大や視野の拡大、対照言語学的な観点の普及に役立ってくれることを強く望む次第である。

27言語全データ270特集分の収集達成まで、本号の時点で課題となっていたのは、ドイツ語の1特集分、スペイン語の2特集分、ポーランド語の3特集分、インドネシア語の1特集分、タガログ語の5特集分、ヒンディー語の4特集分であった。全データ収集の意義を理解して下さり、これらの言語データの収集に御協力して下さい先生方、院生、学部生の方々に深くお礼申し上げます。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

ドイツ語の成田先生は、この語研特集の生みの親の一人であるが、今年度定年退職のお忙しい状況の中で御執筆下さった。一緒に特集を始めた者としてこの全データ収集達成の日を迎えることができたことは本当にうれしい。さらに手配や依頼に奔走して下さった『語研論集』編集幹事の先生方、査読をしてくださった先生方、補佐の深尾さん、謝金の円滑な運用に配慮して下さった事務の方々などの御尽力なしにはこうした成果は全く不可能だった。さまざまな方々の御協力に深く感謝申し上げたい。

### 3. 今回収集されたデータの意義

#### 3.1. 対照研究や類型的研究にとって大きな意義を持つデータ

今回得られたデータの中でも、最も貴重なものの一つはコーカサスの言語であるジョージア語の全データであろう。この言語は複雑な形態論を持つ能格絶対格構造の言語（より正確には、分裂能格であり、一部活格不活格型の様相も示す言語）として有名である。長く本学で活躍された千野先生は常々コーカサスの諸言語の研究の重要性を説いていらした。コーカサスの諸言語は類型的にも多様であり、さらに40近い言語を擁しているが、まずはそのデータ収集の第一歩が踏み出せたことは大いに喜ぶべきことである。

前号26号でニューギニアの言語のデータがない、と書いてしまったが、メエ語の貴重なデータが1特集分あることを失念していた。しかしオーストラリア先住民の言語に関しては依然皆無である。

新大陸の言語に関しては今回大きな進展があった。中米のトラバネク語とチナンテク語オスマシン方言の全データが収集された。それだけに次には北米と南米の言語のデータを1言語でも2言語でもいいので収集する必要を強く感じる。日本には宮岡教授のもとで学んだ優秀な北米先住民の言語の研究者がいるはずである。話者の減少と高齢化という問題があるとはいえ、反面それだけにその収集は急務である。

比較的大きな語族としてドラヴィダ語族やチュクチ・カムチャツカ語族の言語のデータが皆無であることは前号26号でも課題としてあげたところであるが、今回進展はなかった。ドラヴィダ語族については次号に期待できる若干の見通しがあるが、チュクチ・カムチャツカ語族については、昨年2月に始まったロシアによるウクライナへの侵攻がここでも暗い影を落としている状況である。

系統的に孤立した言語のデータとしては、今回1特集だけではあるがアイヌ語のデータの加わったことが非常に意義深い。アイヌ語に関しては現時点ではもはや調査によって例文を得ることが非常に難しい状況である。こうした状況の中で、吉川先生には文献による調査に基づいて研究・執筆していただいた。これは本特集のデータ収集において、新たな地平を切り拓くものとなった。死語や、もはや調査の難しい段階に至ってしまった言語は対面調査によってデータを得ることができず、調査は文献に拠るしかない。このように過去に収集されたテキストやフィールドノートの分析に基づく言語学的・人類学的研究は「フィールド文献学」と呼ばれている（宮岡（1992）,（1996））。不明な個所も残ってしまうかもしれないが、逆に不明な個所が明らかになることによって、さらなる調査／研究のポイントが洗い出されるという効果も期待できる。今後もフィールド文献学により収集された特集データの作成が後続していくことを期待したい。

同じく系統的に孤立した言語のデータとしてバスク語の1特集分のデータが得られたこともきわめて重要である。バスク語は類型的な観点からみても、主要部標示型で能格絶対格構造の言語であり、そのデータはきわめて興味深い。本学でスペイン語を教授なさっている非常勤講師の方が母語話者であったことから収集が実現した。分析はまだ間に合っていないが、例文自体は全特集分集まっているので、次号までに分析を進めたいと考えている。他にやはり系統的に孤立した言語であるブルシャスキー語についても現在依頼中である。

#### 3.2. 語族内での変異や歴史、さらには語族全体の特性を解明していくために重要な意義を持つデータ

前号26号で「データ収集の可能性が高い言語でありそのデータ収集が直近の課題である」として取り上げたのは次のような言語であった：バルカン半島の諸言語；ケルト諸語；バルト諸語；チベット語諸方言；漢語

の7大方言；26のチュルク諸語のうちの残り18言語；シロンゴル・モンゴル諸語；シベ語；南北琉球諸語を含む日本語諸方言。

これらの言語のデータのうち、今号で収集できたもの／できなかったものを見ていく。

まずバルカン半島の言語に関して、ブルガリア語の5特集が加わり全特集分が揃ったことは、スラブ諸語の対照にとって大きな意義がある。次の課題となるのは、まずスラブ諸語では双数を残すスロベニア語であり、ロマンス諸語ではルーマニア語であり、その収集は十分可能だろう。現代ギリシャ語とアルバニア語は難しいかもしれないが、次の次ぐらいの課題としたい。ケルト諸語とバルト諸語については今回進展はなかった。バルト諸語に関しては、ラトヴィア語とリトアニア語について各4特集ずつすでに収集されているので、全特集分を揃えたい。ゲルマン語派についても、今後アイスランド語を含むノルド諸語のデータが得られるとよいだろう。今回1特集だがアフリカンス語のデータが得られたことは興味深いことであると思う。言語接触の観点からはイディッシュ語やロマ語のデータの収集も重要だろう。

チベット語諸方言については、今回アムド方言の受動表現のデータが得られた。他のデータもグロス付け等分析が間に合わなかったがデータ自体はあるので、次号には全部揃う予定である。次の課題として、中央方言（ラサ方言）とカム方言のデータを収集し、チベット諸方言の大雑把な全体像を得ることが期待される。チベット・ビルマ諸語については、カトマンズ・ネワール語について2特集、ティディム・チン語についてヴォイスのデータが集まった。日本にはチベット・ビルマ諸語を専門とする優秀な研究者が多くいらっしゃるので次号以降もさらなる収集の成果が期待できる。一方でこのデータがそれらの研究者の方々の（対照）研究に資するものとなることを願う。

漢語諸方言に関しては平江方言、赤壁方言、諸暨方言についての合計25特集分のデータが集まった。上海語や広東語、台湾語など大言語のデータ収集は本学であれば決して難しくはないはずだと思う。

いわゆるアルタイ諸言語に関しては、トゥバ語とサハ語のデータが揃い、ウイグル語のデータが加わった。チュルク諸語については次にカザフ語やアゼルバイジャン語のデータ収集が可能であると考えている。シロンゴル・モンゴル諸語について、筆者は現地調査によって得たデータをある程度所持しているが分析ができていない状況である。筆者自身の分析の力が不足している感は否めないが、何とか形にしたいと考えている。

東アジアの言語に関し、慶尚道、全羅道、済州島の朝鮮語諸方言のデータ収集も重要であると考えている。

ウラル語族はフィンランド語のデータが全特集分あるので、次にまずはハンガリー語を揃えたいところである。

アフリカの言語は、グイ語のデータが揃っている上に、今回ベンバ語とアカン語のデータが2つずつ加わった。ベンバ語はバントゥ諸語の一つであり、アカン語は孤立的な西南アフリカの言語であって、大きく見れば同系統でも類型的に大きく性格が異なっており、それぞれ非常に貴重である。今後はアラビア語以外のアフロ・アジア語族の言語（特にハウサ語）やナイロ・サハラ語族の言語のデータがあれば、アフリカ諸言語のデータはたいへん大きな意義を持つものとなって来るだろう。

オーストロネシア語族に関しては、スンバワ語1特集とカガヤヌン語2特集のデータが加わった。オーストロネシア語族の言語の数は莫大だが、今後、なるべく系統的に距離の離れている言語のデータが集積されてくることを期待したい。その観点からすれば、台湾先住民語のデータの収集がきわめて重要な意味を持っていると思われる。東南アジアにおける言語接触や接中辞の起源などの問題にも深く関わっているので、クメール語以外のオーストロアジア語族の言語データや、タイ語とラオ語以外のタイ・カダイ語族の言語のデータも今後収集していく必要がある。

### 3.3. 日本語諸方言への展開

さらに今回ユニークで貴重なものとして、大阪方言の全10特集分のデータが得られた。その形式も、グロスなしでアクセントの標示や1拍語の長音表示があるというユニークなものとなっている。近年、方言に

対するより言語学的で体系的な文法記述への需要が高まっている。琉球の諸言語／諸方言をはじめ、いくつかの記述的な文法も刊行されてきている。こうした状況下において、本特集のように文法カテゴリーに重点を置き、世界の他の言語との対照を視野に入れたデータを収集することにはいくつかの意義があると考えられる。まず第一に、これまでの方言研究が伝統的な国語学・日本語方言学の観点に縛られていたきらいがあり、活用やアスペクトなど一部の文法現象の記述に偏っていた点に対する是正という貢献である。世界の他の諸言語の研究から生まれてきたこの特集の調査票に基づく研究によって、その偏っていた部分や度合いを明確にしていけるのではないだろうか。第二の点として、記述文法というもの、なるべく網羅的に書こうと思ってもどうしても欠けている部分が出てしまうものである。本特集例文の調査によって、そうした不足部分の、全てとは行かないまでも一部を意識できるようになるといった効果が期待できる。もちろん琉球等を含め多くの諸方言のデータが集積されれば、方言間での対照研究が可能になるが、そのことが有する意義については言うまでもないだろう。

まだ一方ではあるが、これが参考になり、またきっかけとなって今後いくつかの方言のデータが集積していくことを期待したい。「日本語族」のバリエーションの大きさや多様さについても、統一した例文データがあれば、世界の他の語族におけるそれと対照することによってそれを測ることが可能になってくるだろう。そうした意味でも今回大阪方言のデータが得られたことは貴重な第一歩であると考えられる。

#### 4. 今後の目標

方言として数えられているものを含め、現時点で（最低 1 特集でも）収集された言語の総数は 97 である。語学研究所の幹事会でも同意を得ることができたが、今後の 5 年間でこれを 300 言語に、10 年後に 600 言語にすることを目標としたい。先に述べたように地球上には 6,000~7,000 の言語があるので、300 言語は 1/20、600 言語であれば 1/10 を占めることになる。同じ語族で系統的にも近い言語は互いによく似ているので、系統的に孤立した言語を十分に含んだ 600 言語のデータがあれば、それに基づいた類型論的な考察はある程度意味のあるものとなるだろう。途方もない目標なのかもしれないが、できることをよく考え、よく工夫し、臆せずチャレンジを続けていきたいと考えている。SNS や自動翻訳が大きく発達しつつある現在、現地と何らかの接続さえあれば、こちらで作文したものを送って母語話者に確認・修正してもらうことによってデータを作成する、というようなことも可能になってくるかもしれない。

一方で、前号 26 号の「まえがき」にも書いたが、データの収集はあくまでも第 1 段階であり、ある程度の数の言語のデータの収集が進みつつある現在、今度はそれらをどのような切り口からいかにも活用していくか、ということが第 2 段階における重要な課題となってくる。新たな言語のデータの収集と共に、今年度はこれらのデータを基にした類型論的な分析・考察の試みも行っていきたいと考えている。

日本国内だけでもおそらくかなりの数の言語の話者と、多様な言語を研究している多くの言語研究者がいるに違いない。筆者の知り合いの研究者たちへ、さらに同僚の研究者たちのまた知り合いの研究者たちへと依頼を広げ、データを拡充していきたい。この特集データに関する「広報」も必要だろう。この「まえがき」を読んでくださった方で、可能だという方は、何語のどの特集でもかまわないので、たとえグロスなしでも新しい言語のデータの提供を申し出ただけで大変にありがたい。ならびにこの「特集」と「語研論集データベース」の収集・作成・活用等に関して、建設的なアイデアをぜひお聞かせいただきたいと考えていることをお伝えして、この「まえがき」の筆を置くこととする。読者からの御教示、御批判御叱正等をいただければ幸いです。

連絡・問い合わせ先：kazamas@tufs.ac.jp, ilr419@tufs.ac.jp

## 謝辞

今回、データを作成・提供して下さった先生方、ならびにそのコンサルタントとなって下さった話者の方々にお礼申し上げたい。特に本学以外の他の機関に所属されている先生方で、本特集のデータ収集の意義に御理解を示して下さい、データを作成・提供して下さった先生方に深くお礼申し上げます。上記の「まえがき」本文に、それぞれの言語と共にそのお名前をあげてお礼を申し上げたかったが、筆者が直接に依頼した先生方と、間接的に依頼した先生方との間などで、筆者の言及の仕方の度合いが違ったり、不平等・不統一になることを怖れて記すことはしなかった。ここに一括して謝辞を記すことをお許し願いたい。

## 参考文献

- 宮岡伯人 (1992) 「アメリカ人類学の黄金時代 ―ハリントンをめぐる巨匠たち」 K. レアード著 一ノ瀬恵訳  
『怒れる神との出会い ―情熱の言語学者ハリントンの肖像』 東京：三省堂
- 宮岡伯人 (1996) 「第6章 テキストの蒐集と利用」『言語人類学を学ぶ人のために』：世界思想社